

2004～05年度長期受け入れ学生オリエンテーション報告

台風の接近が危惧される中、8月29日(日)、長期及び短期の帰国学生による報告会に先立ち午後1時より泉大津市の「きららホール」において、今年度の受け入れ学生に対するオリエンテーションが実施されました。今年の受け入れは、アメリカ5名、カナダ1名、ドイツ2名、デンマーク1名、インド1名、タイ1名、エクアドル1名の合計7カ国15名となっています。このオリエンテーションでの指導が中途半端であれば、学生達に誤ったサインを与えることになり、結果としてホストファミリーやホストロータリークラブにご迷惑をかけることとなりますから、ここは地区委員の正念場でもあります。まず、学生達に強調したのは、ロータリーの4Dルールとして知られている、No Driving, No Drinking, No Drag, No Date, の基本ルールでした。つまり、車やバイクの運転をしない、アルコールを飲まない、麻薬などの薬物を所持・使用しない、異性との個人的なお付き合いをしない、ことなどです。このルールに違反した場合は、警告を与えることなく即刻帰国させることを確認した後、遠方に旅行をする場合は、地区委員長の許可が必要であることや、携帯電話の使用は、今年の末まで許可されないことなどを伝えると共に、多くの友人を作って早く日本語を習得するようアドバイスを与え、またその際、友人の選定についても注意が必要であることなどを聞かせました。30分間にわたる注意と警告と助言に対して、真剣に耳を傾けている学生の姿をみながら、今年1年、この子達が無事に交換生活を終了し、沢山のいい思い出をお土産に帰国してくれることを願った次第です。ホストファミリーの皆さん、そして受け入れロータリークラブの皆様、見知らぬ外国に飛び込んできた可愛い学生達をどうかこの1年間、家族の一員として厳しく且つ温かくお世話をお願いします。私たち地区委員は、陰ながらお手伝いをさせていただきますので、お困りの時にはご連絡を下さい。

2003～04年度長期派遣学生の帰国報告会

この夏に海外から帰国した長期派遣学生9名の帰国報告会が、上記オリエンテーションに引き続き同じ「きららホール」で行われました。出発前のスピーチでは、ほとんどの学生が恥ずかしがりながら自信なげに挨拶をしていたのとは全く異なり、全員が堂々と、しかもユーモアを交えてスピーチをしました。最初は派遣先の国の言語でスピーチを行い、続いて日本語のスピーチを行いましたが、時間がないからと地区委員から制止されるほど、話題が尽きない有様でした。ある地区委員からは、「青少年交換活動は我々担当者にとって大変な面もあるが毎年この帰国報告スピーチを聞く度に新たな元気が出てまた1年間頑張ろうという気持ちになる」という声が聞かれました。帰国学生達が一様に声を揃えて述べていたのは、外国で暮らすことで逆に日本という国がいかに素晴らしい国であるかを実感できたという点でした。日本にいるときには気がつかなかった自国の素晴らしさに気づかされたことが大きな収穫であったと述べています。と同時に、向こうで日本のことを聞かれても十分な知識がないため、ほとんど答えられなかったことが恥ずかしかったという

感想を漏らしていました。戦後の教育のあり方を再点検する必要がありそうに感じたのは私だけではなかったと思います。ともあれ、全員が親善大使としての任務を果たし無事に帰国したことに関係者一同ホッとすると同時に、彼等を誇りに思った瞬間でした。なお、帰国学生の派遣先は、アメリカ2名、カナダ2名、メキシコ1名、スウェーデン1名、デンマーク1名、ドイツ1名、オーストラリア1名、でした。

2004～05年度短期派遣学生の帰国報告会

今年度の短期交換は、アメリカ3名、カナダ2名、オランダ2名の合計7名でした。7月の下旬に相手国からの学生を受け入れ、3週間ほどの滞在後、帰国に合わせて日本の学生が渡航し、やはり3週間くらい向こうで滞在をした後帰国するというものです。長期派遣学生に比べて滞在日数はかなり短いのですが、皆さん中身の濃い経験をしてこられたことは彼等の帰国報告から十分に窺えました。中には、短い期間に素晴らしい経験と同時に苦い経験もしてきた学生もいましたが、一様に、出発前に比べてひとまわり大きくなったように感じられました。例えば、アメリカからの帰国学生の中には、帰国途上、乗り継ぎ空港で帰りの飛行機が自分の到着前に出発していたため、空港で一晩を明かすという貴重な(?)経験をした学生もいました。彼等の挑戦と健闘を心から讃えたく思います。

国際ロータリー第2640地区青少年交換委員会

委員長	北島 一樹
副委員長	納谷 健太郎
委員	田中 正三
同	加藤 彰宏
同	村本 辰弘
同	吉岡 宏明
同	藤堂 俊隆